

## 異言語を通した読み書き教育 ——普通話と英語を習う中国の幼児——

○ジャン・イングルスルド（九州ルーテル学院大学）

ケイト・アレン（九州ルーテル学院大学）

### はじめに

中華人民共和国の子どもに対する読み書き教育は、単なる幼稚園や小学校のカリキュラム上の問題ではない。政治と経済が絡む要素が大きい中で、中国の都会に住む子どもたちは標準語を習い、その言語を通して読み書きを習う。このプロセスには2つの記号システムが存在しており、それぞれ異なる性質の習得がある。さらに最近、早期英語教育の普及にともない、子どもの読み書き教育に新たな要素が登場する。

都会に住む子どもの方が読み書きを良く習得しているのは、9年間無償で提供される公教育を受けることができる社会環境にあるからだといえるだろう。一方、都会から遠距離の地域に住んでいる子どもは、6年間教育を受ければ十分であるという状況におかれている。人口の約74%が人口は県部（郡部）に居住しているため(China Facts and Figures Annal, 1994)、子どもが学校に在籍する割合も同じだと考えることができる。1970年代末期から始まった中国の経済改革は、地方の改革から着手されたが、経済発展が一番早く進んだのは都会であった。従って、都会と地方における教育期間の普及格差は今もなお増大している。

このような社会的・経済的背景に関わらず、カリキュラム上の教育的目標が定められている。読み書きの教育目標は、学校で習う漢字の数である6年間3500字（江蘇省教育委員会、1990）という数字が示されているだけで、それらの漢字をどのように活用するかという読み書き機能に関する記述はない。学校教育では5000字から6000字まで覚えることが必要だといわれているが、実際の日常生活では1500字が基準といわれている（江蘇省教育委員会、1990）。さらに、多くの問題が残されている。中国語の文章には簡体字と繁体字が存在しているが、教育目標に示されている数字には、この現象が盛り込まれていない。また、学校で覚えた漢字をどれほど大人が覚えているのかが問題である。

中国の学校における読み書き教育は、単にその機能を育てるのが目的ではない。標準の中国語発音と語彙を用いながら読み書き教育が行われている。したがって、1年生語文（国語）の授業は外国語のレッスンに似ている。読み書きを習いなが

ら、同時に話し方も学ぶのである。漢字も地域の方言を通して習わずに、普通話（標準語）の発音を通して習う。特に普通話とかなり異なった方言を話す地域の子どものには、このような教育は負担をかけているように思える。元植民地の国などで引き続きヨーロッパの言語を通して教育を受ける状況と類似している。

子どもはまずローマ字から習うのです。その理由はローマ字を習うためではなく、普通話を普及させるためである。漢語音のローマ字を覚えたなら、それを用いながら漢字を習う。すなわち、中国語の読み書き能力は、国が定めた普通話の発音基準に即したものとなる。普通話を媒体とする読み書き能力育成の過程において、アルファベットおよび漢字という記号が登場する。これら各々の記号システムに習得の難容度を比較すると、幼児にとってアルファベットが特に難しいことが多くの研究で指摘されている。中国では漢字があるのにローマ字から教えるという特徴と矛盾がある。

これらの問題に興味を持った我々は、南京にある大学で言語学の講義をしながら、子どもの読み書きを観察する小学校を探し始めたのである。1990年8月に非常に複雑な手順を経て、江蘇省の教育委員会の事務所に協力を得て、正式に長江路小学という学校を紹介された。この学校は室内プールなど良い設備にめぐまれ、南京市の小学校の中でも模範校の指定を受けており、研究授業なども定期的に行われていた。そこで我々二人は、一年生の最初の5週間の授業を毎日教室の後方で観察した。さらに、漢字の紹介が始まる6週目まで観察することが許された。この観察から明らかになったことは、子どもたちは小学校に入学する以前に、すでに漢語拼音を習っていることであった。幼稚園ではそのような教育を実施していないという教育委員会の主張を確認するため。1991年と92年の春、南京大学付属幼稚園の幼児大班対象に開かれている週1回の進学前汉语拼音クラスを観察し、学校の教科と比較することができた。しかし、いくつかの疑問が残ったため、さらに小学校で観察できる機会を求めた。公式なルートではなく私的に紹介された小学校の先生の配慮で、再び6週間の漢語拼音の授業を観察できた。前回と異なる点は、普通の小学校であることと、

先生も子どもも入れ替わることのない状況で観察できたことである。

これらの3つの教育現場からデータを収集し、さらに2つの要素に焦点をあて、子どもが普通話と読み書きを習得する際、異言語である方言と英語の関わりについて述べたい。

### 方言の圧迫

南京市の方言は普通話話す中国人にとって完全にわからないことはない。英語の例に取れば、アメリカ・シカゴで話す英語とオーストラリア・クイーンズランドで話す英語の違いに似ている。上海でしゃべる呉語や香港でしゃべる粵語ほど違いがない。

しかし、方言と普通話の指導において、教師は明らかな態度を示した。ある教師は、「这是南京話 不好听」（それは南京弁、聞きづらい！）と言った。このような教師の態度は、模範小学校でも地域小学校でも見られた。しかし、微妙な違いもあった。例えば、模範学校では「我们普通話、

。。」（我らの普通話、。）、地域学校では

「我们南京人、。。」（我ら南京人、。）と躡るのである。模範学校の先生たちは、教師として中央の使命を受けている意識を強く持って指導にあたる。一方、地域学校では躡りが厳しくても、教師も地元の人間という意識が強く、子どもが発する言葉の問題に同情的であり共感を示す。

発音の問題は、[n]の[l]の区別や破擦音が摩擦音になる現象が方言に存在することである。南京の名前を[lanjing]と発音する子どもいた。教室での観察データによると、[n]→[l]のパターンが[l]→[n]のパターンよりは多い。しかし、これは自由変異の現象であり、[lanjing]と発音した子どもは無意識に[nanjing]と発音することもある。破擦音の場合、例えば、上海は[sanhai]と発音します。この発音は[n][l]の自由変異と違って、かならず発音される。先生方も方言の発音になるケースもかなりある。

授業では、標準の発音と同時に標準の単語を強調していた。すべての幼児語および方言は訂正された。問題が生じる原因は、新しい音節をローマ字で習うことである。教師は音節を用いて単語を作るように子どもを促す。しかし、子どもが作った単語は、標準の単語ではないという問題が生じる。例えば、[yu]の音節を習っていると、yutou芋頭という単語が出てきた。教師は、「それは方言です。普通話で[digua]地瓜と言います」と訂正する。このようにして、子どもたちは方言と標

準語の区別を学び、言語に対する価値観を身につけていく。しかし、非標準的な発音や語彙だけが異言語ではない。外国語も幼稚園や小学校の子どもの環境に存在しているのである。

### 早期英語教育の影響

一年生の最初の語文授業で「なぜ漢語拼音（ローマ字）を習わなければならないのでしょうか」という先生の問いかけに対して、「英語は同じ字を使うので便利だから」という答えが返ってきた。しかし、5-6週間にわたるローマ字の授業が終わると、「我々は中国人です。」中国の文字”は他国の文字とは違うのです」と先生は言い始める。漢字の読み書きが始まるのが、中国の子どもたちにとって本当の読み書きの勉強を始めることになるのである。

漢字を習うという大変な勉強の状況にあっても、都会の保護者たちは一人っ子の我が子に様々なけいごを習わせる。バレエ、ピアノ、小林寺法などと共に英語のレッスンは流行している。ある学校でも、55名のクラスのなかで約20名が英語を習っていた。ある園児がどうしてローマ字の大文字を習わないのかを先生に聞くと、漢語拼音は固有名詞以外大文字を用いないためとの返事が返ってきた。一年生にも大文字を教えていないようであった。単語の練習の時、方言の単語と一緒に英語が混じる場合もある。例えば、[lou]の音節の場合、“hello 的 lou”と言ったり、[k]の文字を習うとき、“ok 的 k”と言ったりする。

漢字を習うという大変な勉強の状況にあっても、都会の保護者たちは一人っ子の我が子に様々なけいごを習わせる。バレエ、ピアノ、小林寺法などと共に英語のレッスンは流行している。ある学校でも、55名のクラスのなかで約20名が英語を習っていた。ある園児がどうしてローマ字の大文字を習わないのかを先生に聞くと、漢語拼音は固有名詞以外大文字を用いないためとの返事が返ってきた。一年生にも大文字を教えていないようであった。単語の練習の時、方言の単語と一緒に英語が混じる場合もある。例えば、[lou]の音節の場合、“hello 的 lou”と言ったり、[k]の文字を習うとき、“ok 的 k”と言ったりする。

### まとめ

方言に対する教師の態度は一貫して否定的である。しかし、英語に対しては同じ様な態度はとらない。ある先生は英語を習っている生徒に対して勇敢であると褒めた。単語の例として英語が出て、あまり厳しい反応はない。中国の学校での読み書き教育に現われる異言語は、同じ様なとり扱いを受けていない。中国の読み書き教育は、普通話の普及に利用されている。方言はたとえ地方文化を表わす様な役割を果たすものであっても、教育の教科には含まれていない。しかし、同じ異言語でも英語は違う。中学校の教科と認められているし、高校や大学の受験に必要とされており、英語はあまり否定されていない。